伝奇ミステリー

戸隠霊峰の神魚

志茂田景樹

kosaido blue books

戸隠霊峰の神魚

KOSAIDO BLUE BOOKS

著　者　志茂田景樹

発行者　川口勝治

発行所　廣済堂出版

〒105
東京都港区芝2-23-13
電話　03-453-1201(代)
振替　東京8 164137番

印刷所　株式会社　廣済堂

昭和56年12月15日　初版

650円

©1981　志茂田景樹

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

戸隠霊峰の神魚

志茂田景樹

OSAIDO BLUE BOOKS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

目次

戸隠霊峰の神魚　7
宝魔一族　69
横笛を吹く死神　139

戸隠霊峰の神魚

〈日々に新たなる意欲をかきたて、独創の世界を深く追求しております。サンショウウオを描くのが好きなぼくは、これからもサンショウウオを描きつづけていきます。サンショウウオの持つ生命と形態を表現することに、ぼくはすべてを賭けています。

このたび、新宿・原島画廊にて、個展の運びとなりました。ぼくにとって、九回めの山椒魚油絵展です。

敬愛なる皆さまのご清鑑、ご批評を鶴首申しあげます。

河原淳七郎〉

1

その個展の通知が配達されたとき、わたしは、あの河原が画家だって、とつぶやいた。

河原淳七郎に対して、わたしはあんまりいい感情を抱いていなかった。

わたしと河原は高校の同級生であった。わたしたちの高校は、栃木県のK温泉にあったが、わたしの家はK温泉からさらにK川沿いにバスで一時間半も奥へはいったU村にあった。河原の家はU村よりひとつ手前のS村で、U村もS村も三方を山に囲まれた、やせた畑が点在する貧しい寒村だった。

どちらの村も中学までしかなかったから、高校へ進学するためにはK温泉まで通うしかなかったのである。河原とはこのK温泉にある県立高校に進学して、クラスがいっしょになったことで知りあった。

河原は鈍重で、鼻糞を丸めた指で平気でパンを食べるような男だった。そのくせ妙に欲深なところがあり、期末試験でわたしがカンニングしたところを目撃すると、口止め料を寄こせといって金をたかってきた。そんなことのほかにもわたしには河原に好感を持てなかった理由があり、それは河原の父親に対する偏見からきていた。

河原の父親は寺の住職をしていたが、もともとは祈禱師で各地を流れ歩いていた。S村の山中に檀家が減少して、太平洋戦争中に廃寺になった浄土の寺があり、いつのまにか河原の父親はそこに棲みついてしまった。河原の父親になってから、その寺は天台宗になったり、真言宗になったり、はては聞いたこともない神道系新興宗教の末院になるなど宗旨が猫の目のように変った。

この河原の父親は、近在の評判がひどくわるかった。祈禱で病気を治すといって婦人にいたずらしたり、あちこちの山々から馬頭観音、地蔵などの素朴な石仏や、庚申塚を勝手に自分の寺へ運び移したりした。うわさでは、東京の料亭や成金の豪邸の庭に置く飾り物として売りさばいていたらしい。

そんな悪評はわたしの村にも聞こえていたから、わたしはカンニングの口止め料をたかられたとき、河原の父親のことを思い出して、河原にはもう気を許すまいと固く思った。

二年に進級してクラスが変り、それ以来、河原とは顔をあわせたときにあいさつを交わすだけのつきあいになった。たしか、三年になる前だったと思うが、河原の父親は寺の裏山の岩から転落して死んだはずである。

河原とは、高校を卒業して以来、あっていない。その河原がなぜ突然、わたしに個展の通知を寄こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

したのか。画家になっている、ということを誇示したかったのかもしれない。あの河原が画家に――とわたしは疑念のようなものさえ抱いて、その通知をあらためてながめた。高校時代の河原をいくら振りかえってみても、画家になるような徴候はケシ粒ほどにも見られなかったからである。

通知は長細い変型葉書で、宛名を書くほうに個展会場と会期と簡単な画歴が印刷されている。

一九六五年　栃木県立K高校卒業
一九七一年　銀座日動画廊にて初個展
一九七三年　第二十七回東陽展に出品

このあと、一九七九年、つまりことしに至るまでの、個展開催や公募展へ出品したという事実の記載がなされている。が、入選や受賞の記載がないところをみると、たいした画歴ではない。

裏面にカラーで印刷されている最近作と但し書きのある作品を見ても、ちっとも感心しなかった。暗い色彩を使って、数匹のサンショウウオが湿った朽葉に潜んでいるところを描いてあるが、素人のわたしが見ても稚拙と知れるものなのである。

それにしても、なぜサンショウウオばかり描いてきたのだろうか、と考えて、わたしは忘れていた、ある記憶を思い出した。

一度だけ、彼の家、つまり、彼の父親が住職をしている寺へ遊びにいったことがある。本堂の外縁にガラスの水槽が置いてあって、なかにサンショウウオがうじゃうじゃいた。

「こうして呑むと、精がつくんだ。親父は、毎日、これを十匹ずつ呑んでいるんだぜ」

そう言うと、河原はサンショウウオのしっぽを指でつまんで口に放りこんだ。一匹だけでなく、三匹もつるつると呑み下してしまった彼を、わたしはあきれて見ていたおぼえがある。

わたしのいなかのほうでは、山奥にサンショウウオが多く、それを蒸し焼きにしたものを湯治客にも出すことがある。けれども、生きたまま食べる人間は知らなかった。

そんなことを思い出しているうちに、ともかくも河原の個展を覗いてみようという気にわたしはなり、それから数日後の午後に出かけた。

2

原島画廊は靖国通りに面した有名な中華料理店のすぐ並びにあって、ビルの一、二階を使っていた。一階の受付で記帳をして、河原の姿を探したが見あたらなかった。

「――河原は？」

「ハイ、ただいま外出しておりますが、すぐにもどります」

アルバイトらしい受付嬢は、しゃちこばって答えた。

「そう。……盛況かい？」

「はあ、ぼつぼつ」

受付嬢は、あいまいにうなずいた。わたしは、絵を見歩き出した。ビルといっても、フロアの面積は十坪ほどしかない。その四方の壁に、五号から三十号ぐらいまでの作品が十五、六点、展示してあ

る。どれもこれも同工異曲のものだが、素材がサンショウウオなので、いちおうものめずらしさはあった。

どの作品の下にも、算用数字で譲渡価格を書いた紙が貼りつけてある。三点に二点は、売約済みの標示なのか、赤テープの切片を貼ってあって、わたしをびっくりさせた。

だいたい、号二、三万円といったところだが、河原の絵をそれだけ買ってくれる人間がいるというだけで、わたしには瞠目すべきことだったのである。

二階へあがると、一階とおなじように、十数点の作品が展示してある。和服姿の女性がひとり、いた。

その横顔を見て、わたしは思わず足を停めてしまった。先客は、二十七、八歳、いや、ひょっとしたらもっともっと上かもしれないが、だれもがハッとするにちがいない女性だった。

ちょっと翳りが射しているが、彫が深く、品のよい面だちをしている。が、着ている着物はへなへなして白っぽく、見るからに粗末なものである。そして、変っていたのは、右手に牛乳びんほどの、金箔の仏像を握りしめていたことだった。

その女性はつぎの絵に歩いて、アッ、とかすかな叫びをあげた。そのあと、ぐにゃぐにゃ、という感じで、床に崩れてしまった。

「——だいじょうぶですか？」

わたしは駆け寄って、その女性を抱き起こした。彼女はわたしの腕のなかですぐに気がついて、あ

わてて立ちあがった。倒れたときも右手から離さなかった仏像は、よく見ると観音像だった。
「すみません。ちょっと貧血を起こしたもんですから」
「よほど気分がわるいんじゃないですか？」
彼女の表情にはおびえがあり、わたしにはただの貧血には見えなかった。
「いえ、だいじょうぶです」
「そうですか」
わたしは、彼女が見て叫んだ絵に目をやった。縦長の二十号ほどの、その絵は、それまでのものとはすこし趣きを異にしていた。
小滝を背景に、裸の女が岩にのけぞるようにして寄りかかっており、両肢をよじり気味に広げている。顔はうんとうしろへ反らせているので、表情はわからない。女体は、全体的にぼかして、幻想味を出している。
そして、女の体に七、八匹のサンショウウオを這わせてあった。陰部とおぼしきところにいる一匹は、後肢としっぽしか描いていない。顔と前肢が潜りこんでいるように表現したのは、明白だった。
「――この絵になにか……」
と、わたしが訊きかけると、その女性は強く首を振った。
「先生がおもどりになられました」
階段の下から受付嬢が大声で呼んだので、わたしはまだすこし気になったが、降りていった。

ひと目で美食しているとわかる、こってりと肉づきのよい男が笑って立っていた。福々しい顔の、その男が河原淳七郎だとわかるまでに、二、三秒はかかっただろう。
「河原か？」
「ああ、ひさしぶりだな。なつかしいよ」
河原は、気軽に握手を求めてきた。ひどくやわらかいその手を握りながら、わたしは河原の生活が豊かなのを直感した。
「なにをしている、いま？」
「カメラマンだ、動物専門に写真を撮っている。一年の三分の一は、アフリカ、インド、南米の草原やブッシュを歩きまわって、写真を撮っているよ」
「へえー。うん、志田は高校のときから写真が好きだったからな。もうかってるか？」
「いや、フリーになってから三年めだから、まだまだ駆け出しだ」
「そうか、うん、おたがい独立独歩でやってるフリーランサーなんだな、なつかしいよ」
河原はわたしの手を握ったまま、大きく強く振った。
「――おもしろい絵だったよ」
「そうか、いや、ありがとう。オープニングの日には、楠田がきてくれた」
「ほう、通産省にいった、あいつが」
わたしは、正直、意外だった。楠田という同窓生はつめたいタイプの秀才で、まちがっても河原な

どとつきあうはずがないと思ったからである。
「きょうは、根本がくる」
「——根本？」
「サッカー部にいた、あのすばしっこいやつだよ。きみとはクラスがちがったけれど」
「ああ、思い出した。あいつ、どうしてるんだ？」
「やつは高校を出ると、警視庁の巡査になった。いまは刑事だ、それも、新宿署にいる」
「へえー、そんなのが同窓生にいたのか」
「まあ、坐ってくれよ」
部屋の中央に置いてある、簡単な応接セットを、河原が示した。わたしたちは、向かいあいにかけて話を続けたが、話をしながら、わたしはたえず階段に注意を配っていた。
さっきの女性がまだ気になっていたからだが、彼女はなかなか降りてこない。学生ふうの三人連れが入ってきて、一階の絵をざっと見てから二階へあがっていった。通りがかりに、ひやかし気分で覗いたのだろう。
そのあと、サングラスをかけ、髭を長く生やした男が入ってきて、記帳すると、河原に声をかけてあいさつした。そして、ちょこちょこと一階の絵を見ると、二階へあがっていった。
「——美術雑誌の記者なんだ。去年の個展にもきていた。おれもあちこちで注目されるようになってきている」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton